

市民社会とCSOセミナー・シリーズ2 『グローバル化とコミュニティ教育～米国南部の視点』

【日時】2003年9月17日(水)

【場所】文京区民センター会議室3A

【主催】CSO連絡会

【協力】(特活)開発教育協会、日米コミュニティ・エクステンジ(JUCEE)

【プログラム】

スピーカー: スーザン・ウィリアムズ氏

Highlander Research and Education Center 教育コーディネーター

コメンテーター: 湯本浩之氏 開発教育協会事務局長

質疑応答およびディスカッション

スピーカー:スーザン・ウィリアムズ氏

Highlander Research and Education Center

1. ハイランダー研究教育センター(HREC)の紹介

HREC は、貧しい人が多いアパラチア山脈沿いの田舎にあるトレーニングセンターで、テネシー州に位置している。活動の発端は、1932年の大恐慌の時代に地元の人を巻き込んだ運動を始めたことで、最初の頃は、炭坑労働者を中心とした労働者の組織化や子どもの教育を柱に活動を行っていた。活動のスタイルとしては、もともとはスカンジナビアで始まった教育モデルを参考にした。

1950年代以降、米国南部を中心に公民権運動が盛んになるにつれて工場労働に伴う問題に取り組むようになっていった。最近ではグローバルな課題にも目を向けていて、移民問題を入り口として、国外の問題、特にメキシコへ工場移転の問題に目を向けている。

HREC の教育の基本概念は社会変革を起こす人々を育てることで、ワークショップ等を通じて、参加者同士がお互いに学びあえる場をつくることに努めている。それには、参加者が何でも言えるような環境をつくるのが大事だ。これがうまくいくと、最初は、参加者は孤独感をかかえている場合が多いが、次第に「私も何か貢献できるのでは」と思いはじめ、それが連帯感へと変わってくる。

また、HREC では、文化を大切にそれを表現することに力を入れている。歌や劇を通して、各人が持ち寄る独自の文化を記録している。センターの中に図書館があったりウェブサイトもあるので、これらを通じて情報を分かち合っている。人々が自らの経験を分かち合うことでお互いに学びあい、力の無いものでも社会変革を通して公正や正義を勝ち取っていくという自信をもってもらうようにしている。

2. 地域ベースの課題と世界の課題をどう結び付けているか事例を通して考える(スライドを見ながら)

事例1 「テネシー産業再生ネットワーク(TIRN)」

教会の関係者に声をかけてテネシーで「テネシー産業再生ネットワーク(TIRN)」を組織した。19

89年、工場閉鎖の波が押し寄せてきた時に、労働者、地域の人々、地方政府の人々や教会関係者等、さまざまな人々を集めてどのようなイニシアティブがとれるかという会議を開いた。それをきっかけに、ひとりひとりがどのようなイニシアティブがとれるかを解説したマニュアルを作成して配布した。

当時発見したことに、米国とメキシコの国境近くのメキシコ側で週30ドルでメキシコ人が雇われていることがある。なかには、十代の労働者もいた。そこで1991年に、実際に国境付近で何が起きているかを見に行った。メキシコの労働者やNGOと会って話をした。雇用者側は、賃金の質問については答えてくれなかった。また、労働者の生活環境を見せてもらったが、国際的に知られている一流企業で働いているにもかかわらず、とても劣悪な住環境でかつ週30ドルという低賃金であったので驚いた。

このような交流を生かそうと、米国とメキシコの間でパートナーシップを生み出し、「国境なき組合活動」を展開していった。まず1年目に特に工場労働者の女性の労働環境について互いに分かち合い、それを劇にしてみたところ、両国の女性工場労働者の立場に共通点があることを発見した。さらに、逆にメキシコの労働者を米国に招いて米国の労働状況を見てもらうことも行った。

このように米国外にも眼を向けているうちに北米自由貿易協定(NAFTA)というものが自分たちの生活のレベルにどう影響を与えているかなど理解できるようになった。その結果、貿易についてのキャンペーンを行って市民レベルで情報が届くように努めた。それぞれの生きる場での理解が進むに連れ、真の共感が生まれ、国際的連帯も強まった。

事例2 「テネシー移民難民権利ネットワーク」

グローバル化の波で労働者が移動し始めた。HREC はこれに対して2つの活動を展開した。ひとつは新しい移民の人を組織化する活動。もうひとつは移民の権利の問題を地域の人々に理解してもらう運動である。

今まで外国人のいなかったところに移民の問題が起こってきた。「テネシー移民難民権利ネットワーク」を組織して“気づき”の機会を作った。こういった活動を通して元からそこに住んでいた人々と移民の関係を良くしようとした。もともと、テネシーの人々は外国人と触れ合う機会も少なかったので移民は「恐ろしい人、悪い人」という見方が横行していた。そこで HREC では、「民族を超えて」や「ラテンの人々」という教材を作成し、それを使った教育プログラムで偏見を除き、真の問題を考える支援をした。

グローバリゼーションを理解するための教材も作成した。地元で起きていることを見て、それういグローバリゼーションの文脈でどう理解するか、また民営化とは何かなど、とっつきにくい課題をとっつきにくいと思わせないで学べるワークショップ、教材を用意した。

HREC の活動ははじめから決まっているのではなくて、当事者が考えながら対応していくことを支援する形を意図的にとっている。

コメンテーター：湯本浩之氏 開発教育協会事務局長

スーザンさんの話との接点を探してみるために、私自身の紹介をすることで関連づけられると思う。大学4年の夏に米国オハイオ州に行った。そこで1年間、青少年団体にボランティアをした。最後の1ヵ月で、米国メキシコ国境のエル・パソというところに行った。そこで、米国内に経済格差があったり、川一つ越えたらメキシコがあり、国境をはさんだ格差があることに驚いた。米国に立つ前は、米国は世界で1番豊かで自由な国であると思っていた。ところが、米国に貧困、麻薬、暴

力、家庭崩壊などの負の側面があると知った。帰国して大学を卒業した後、川の向こう(南)で起きていることが見たくなり、アフリカに行った。その後NGOの活動に関わって、公正な社会をつくろうと考えた。

地球社会の問題を解決するには、単に海外に援助するだけでなく、「北」に住む人々の意識変革、社会変革が必要だと考えた。どうすれば自分自身の問題として取り組んでいけるかと考えて、開発教育に関わっている。開発教育は、もともとは「南」のことを知るとい活動で始まったが、最近では市民社会が力をつけながら公平な社会をつくることをめざしている。そのために、地域の問題を世界の問題に関連づける教育が必要。しかし、日本の教育が真の意味の開発教育を実践していくことはまだまだ難しい。

鍵は「新しい学び(教育)をつくっていく」とことと、行政に働きかけ「公平な社会をつくっていく」いくことである。日本には、「コミュニティ教育」という言葉がない。自分達の経験をもとに、自分達が参加して社会をつくっていくことが大切である。

質疑応答

質問:メキシコ側の人々は米国側から来た人をどう受け止めたのか。お互いに、仕事をとったとられたという関係だとか、対立関係はなかったか？

回答:敵対した関係はなかった。人と人との接触がきちんとあったことが重要な要素であり、共通な問題でつながることができた。HREC は人選、教育やオリエンテーションをしっかりと行ったが、それも大きかったと思う。極度に敵対心を持っている人は連れて行かなかった。

質問:スタディーツアーなどの費用はどうなっているのか？

回答:民間財団からの助成金や個人の寄付が主収入。HREC は、年間100万ドルの予算。教材資料等、物品販売したり、土地や場を貸したりしてお金を稼いでいる。メキシコはそれほど遠くなく、スタディーツアーにお金はあまりかけていない。基本的に参加費は取らない。

質問:ワークショップを通じて、「エンパワーメント」というのは、実際どのような手法で達成できるのか？

回答:まず、皆が馬鹿なことをして、誰もが歓迎されているという暖かい雰囲気をつくるのが大切。あと、あまり大きなグループでなく25人以下でやること。これ以上の人数がいるとむずかしい。そして、小さなサブグループで話しあう。人間は本来話すことが好きなので、人がたくさん話させてワークショップが進めることが大事だ。

質問:スーザンさんがNGOにかかわりはじめた動機と今も続けている理由を教えてください。

回答:大学卒業後、偶然コミュニティオーガナイザーの仕事に就いた。この仕事を通して多くを学んだ。この学びを大勢の人々と分かち合いたいと思った。

質問:カリフォルニアのコミュニティ団体でインターンをした経験がある。移民の活動をしているHREC の影響を受けた団体であった。人々が出会って時間を共有するには、どのくらいの時間が必要か？ このエンパワーメントのプロセスにHREC はどのように関わっているのか。

回答:普通ワークショップは金曜日の夕方から日曜日の夕方まで週末を使う。短い時間でもできる。忙しいスケジュールを組まない。いつも考えた時間の半分でスケジュールを組み、無理が

ないようにしている。「学び」をどのように「行動」につなげるかが大切である。行動が起こるように他の事例を紹介する。情報を分かち合うだけでなく、「これが終わったら何をしますか？」ということばをファシリテーターが投げかけ、自然に次の行動に移りやすいような雰囲気をつくる。他の国で誰が何をやっているかという話をきくと刺激になる。例えば、私自身は1990年に今でいうWTOの農業グループの交渉がはじまったが内容が難しそうで勉強しなかった。しかしその6ヵ月後、フランスで5万人の農業従事者が直接行動を起こして貿易交渉を止めたという話を聞き、私も行動をしようかな、と思った。人が動いてものごとく動くと話すのは影響力がある。

スピーカー・プロフィール(セミナー当日時点)

スーザン・ウィリアムズ氏 (Ms. Susan Williams)

Education Coordinator, Highlander Research and Education Center

米国内のコミュニティーグループに対して生活向上につながるような生涯教育の機会を提供し支援する団体 Highlander Research and Education Center で現在教育コーディネーターとして勤務。テネシー大学を卒業、1979年から1989年までの間 Save Our Cumberland Mountainsにてオーガナイザーを務めた後、1989年 Highlander Research and Education Center 入職。地域コミュニティー開発とグローバリゼーションを結びつけた Economic-Environment Program、リソースセンターや図書館の設置に関する事業を担当。現在、南米からの移民問題を取り扱った研究 Across Race and Nation のレポートを執筆中。

湯本 浩之(ゆもと ひろゆき)氏

(特活)開発教育協会事務局長

大学卒業後、在中央アフリカ共和国日本大使館の嘱託職員(在外公館派遣員)として2年間在勤。1988年よりNGO活動推進センターにて各種事業を担当。1996年より開発教育協議会に移り、97年より現職。(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)理事を兼務する他、自治体・ODA機関・大学・学校・NGOなどが各地で主催するセミナーの講師やワークショップのファシリテーターを務めている。